

The Institute for World Literature 参加記

香港 2014

(2014年6月23日～7月17日 於：香港城市大学)

三宅 由夏

母語も専門分野もさまざまな文学者たちが集まって4週間にわたるセミナーに参加する——ある意味で現代文芸論研究室の規模をそのまま拡大したような The Institute for World Literature (通称 IWL) は、2011年の北京での開催から、2012年イスタンブール、2013年ハーバード大を経て、2014年は香港城市大で行われた。羽田から5時間ほどで香港国際空港に到着し、同じく現代文芸論からの参加者であり、期間中に学寮の同室で生活することになっていたウッセンさんと空港からバスに乗り込んだ。この辺りだろうと見当をつけて降りたバス停から「九龍塘」という起伏の多い場所を、二人でスーツケースを引きずりながら歩く。香港はすでに気温も湿度も高くなっていて、コンクリート張りの道路の照り返しがきつい。汗だくの状態でたどり着いた香港城市大学は、100名以上の参加者を受け入れられる学寮や教室を一箇所にもつ、巨大なキャンパスだった。

IWLの期間は前半と後半で二週間ずつに区切られていて、それぞれ一つずつ興味のあるセミナーに参加することができる。参考までに挙げておくと、2014年は以下のような題目のセミナーが開かれていた。

前期

“Grounds for Comparison” - David Damrosch (Harvard University)

“Comparing Copies” - Jacob Edmond (University of Otago)

“Beyond Justice” - Svend Erik Larsen (Aarhus University)

“World Literature and Environmental Crisis” - Karen Thornber (Harvard University)

“From Comparison to World Literature: Readings and Conceptual Issues” - Zhang Longxi (City University of Hong Kong)

後期

“World Cinema” - Dudley Andrew (Yale University)

“World Authors/World Literature” - Theo D’haen (Catholic University, Leuven)

“World Literature and Modern Chinese Literature: Parallels, Counterpoints, and Cross-currents” - Leo Ou-fan Lee (Chinese University of Hong Kong)

“Translation in Asia: Theories, Practices, Histories” - Ronit Ricci (Australian National University)

“From Comparison to World Literature: Readings and Conceptual Issues” - Zhang Longxi (City University of Hong Kong)

各セミナーには 20 名前後が参加し、事前に配布された文献資料をもとに進められた。この資料は、一回の授業（約 4 時間）につき文献 5-7 冊分の抜粋コピーが 8 回分に纏められたものであり（つまり、ひとつのセミナーで 50 冊ほどの本が言及されることになる）、IWL がそのような形式を前提としていることから、各作品をそれ自体として精読するというよりは、テーマに基づいて柔軟にテキストを読むことが、いずれのセミナーにおいても多かれ少なかれ求められているようである。

私が前半に参加した Erik Larsen 教授による “Beyond Justice” と題されたセミナーは、Hannah Arendt、J.L. Austin、Adam Smith、Jacques Derrida などの哲学書や理論書や、Isak Dinesen、Euripides、Shakespeare、Chinua Achebe、Paul Celan、J. M. Coetzee などの文学作品を題材としながら、「許すこと」「記憶や感情を告白すること」「名誉と恥によって規定されるアイデンティティ」「沈黙と言葉の限界」といった各回のテーマに緩やかに沿いつつ、ひろく文学の可能性を問うかたちで進められた。誰かを許すこと、許しを求めることといった身近な例ひとつをとってみても、その行為のあり方や受け止め方、その語られ方や記述のされ方は、文化的な文脈や言語体系の違いによって大きく異なる。この「違い」を指摘したり、ある文化圏でしか通用しない視点に縛られた解釈に注意を促したりするのは簡単でも、そこからまとまった論を展開することは、あらためて指摘するまでもなく非常にむずかしい。このことに向き合おうとすると、まず直面するのが「言語」の問題であり、さらにそのような記述を生み出した当時の文化的背景についての知識もおのずと問題になってくるだろう。これらの問題意識は、IWL 主催者の Damrosch 教授や “distant reading” を提唱する Franco Moretti 教授の研究などを参照しながら参加者がそれぞれの研究スタンスを表明しつつ（意外にも批判的な立場の研究者が少なくなかったことは記しておきたい）、議論の出発点として常に共有されていた。Larsen 教授の膨大な知識に基づく巨視的なまなざしや個々のテキストへの細やかな読みに誘発されて、議論はいつも活気に満ちており、毎回目を見ひられる思いがした。

後半に参加したのは Leo Ou-fan Lee 教授による “World Literature and Modern Chinese Literature: Parallels, Counterpoints, and Cross-currents” で、こちらは事前に出していた希望とは異なるセミナーだったが、たいへん刺激的なものだった。Leo Lee 教授が魯迅の専門家だということもあって、このセミナーは参加者のうち半数が中国文学の研究者だったが、配布された文献資料が Goethe、Tagore、Lu Xun、Gogol、Baudelaire、Malraux、Kafka といった作家のテキストだったことからわかるように、世界文学という観点からみた同時代性や影響関係に焦点が当てられており、中国文学について専門的な知識のない私でも、論の展開や参加者の各々の読み方に触発されることが多かった。テキストの中には横光利一の『上海』（1928）もあり、1925 年に起きた五・三十事件が日本人によってどのように活写されているか、英訳の問題点も含めて議論するという機会に恵まれた。日本の大学にいれば「日本人」であることが当たり前であり「日本人としてこの作品をどう読むか」といった質問をされることもほとんどないが、このような場では「日本人であること」や「日本語を母語とする者」といった立場を、（さしあつりのものでしかありえないとしても）引き受けなければならぬということに改めて思い当たり、ふだん間近にいる留学生の友人たちが置かれている状況に、頭のさがる思いがした。

とはいえ、一ヶ月にわたる滞在をしながら行われる IWL の性質上、セミナーにかぎらず、参加していた研究者や香港という場所から受けた刺激も計り知れない。また、2014 年はちょうど香港の中国政府に対するデモ活動（いわゆる雨傘革命）が大規模に展開された年でもあり、滞在中にも市街

地でその前兆が垣間見られた。帰国後にニュースで「中環 Central」「銅鑼灣 Causeway Bay」「金鐘 Admiralty」「旺角 Mong Kok」「尖沙咀 Tsim Sha Tsui」といった地名を見かけると、実際に歩いて回った場所の光景がパッと蘇り、香港で知り合った友人たちの顔が浮かんでは複雑な気持ちになった。彼らもまた、それぞれの生活に戻ったあと、すでに親しみを帯びたこれらの場所で起きていることに思いをめぐらせていたのではないか。